

# 多拠点型地方演劇祭における時限的な言語景観の可能性

—豊岡演劇祭 2023 を事例とした探索的実践研究—

野津直樹 姚瑶 河村竜也 傅建良 高橋伸佳

## The Potential of Temporary Linguistic Landscape in Multi-Venue Regional Theater Festivals: An Exploratory Case Study of Toyooka Theater Festival 2023

NOZU Naoki YAO Yao KAWAMURA Tatsuya FU Kenryo TAKAHASHI Nobuyoshi

### Abstract

The city of Toyooka, Japan, promotes regional revitalization through cultural tourism centered on the Toyooka Theater Festival featuring performing arts. However, previous attendees cited a lack of mobility in public transportation in their survey responses. As a case study, this research explored whether linguistic landscape, specifically temporary linguistic landscape fulfilled its role during the Toyooka Theater Festival 2023 to alleviate attendees' anxiety about mobility. Pre-festival interviews with college students highlighted insufficient traffic signage at train stations and bus stops. Based on this, student-designed signage was installed at stations and bus stops during the festival. The findings suggest that temporary linguistic landscape has the potential to reduce tourists' anxiety about mobility, but effective information design, particularly considering the proximal, intermediate, or distal perspective concept for placement, is important.

**Key words:** Linguistic landscape, temporary linguistic landscape, theater festival, art festival, cultural tourism, wide-area excursion

(2024年3月3日受付, 2024年8月6日受理, 2024年9月30日発行)

### 1. 研究背景

日本では、2020年に「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律（通称、文化観光推進法）」が成立し、「文化の振興を観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興に再投資される好循環を創出すること」が目指されることとなった（藤野、2022a）。ここで示される「地域の活性化」とは、2019年に文化庁・観光庁・その他関係者により設置された「文化施設を中心とした文化観光の在り方

に関する検討会議」における議論（文化庁、2020）を参照すると、文化観光の推進が観光客の消費活動を拡大することで起こるものであると期待されている。

文化観光推進法に基づき、2024年4月現在、全国で16件の地域計画が政府から認定を受けている（文化庁、2024）。その中でも、2021年度に認定された兵庫県豊岡市の「豊岡市地域計画」（文化庁、2021）は、地域計画の文化観光拠点施設を常設の芸術文化展示施設ではなく、舞台芸術を中心とした芸術活動のための滞在制作施設（以下では、アー

ティスト・イン・レジデンス施設と呼ぶ)とした唯一の計画であるという点で特異である。「豊岡市地域計画」によれば、豊岡市は「演劇やダンスなど舞台芸術」を地域の文化資源と捉え、「深さをもった演劇のまちづくり」を文化資源の活用方法として位置付けている。2014年に旧・城崎大会議館をアーティスト・イン・レジデンス施設としてリニューアルする形で開館した「城崎国際アートセンター」は、「深さをもった演劇のまちづくり」の起源であり、現在も中核となる拠点施設であるとして、今回の地域計画における文化観光拠点施設として選ばれた。

文化観光推進法の成立以前より、豊岡市の地域活性化を促す基幹産業は宿泊、飲食サービスを中心とする観光業である(豊岡市、2019)。しかし、「豊岡市地域計画」では、文化観光を推進する根拠となる豊岡市の課題として、「主要な観光地・宿泊地である城崎温泉を訪れる観光客を、市内の他の観光地・文化拠点へ誘導し、市内の周遊に結びつけることができていない」「滞在時間、滞在日数を

増やす取組みが求められる」等が挙げられている。

以上のことから、豊岡市の文化観光推進の成果として、まずは城崎温泉を訪れる観光客の周遊行動を拡大し、市内滞在時間および滞在日数を延ばすことが重要だといえる。そのための「文化観光推進の新しいエンジン」として地域計画上で位置づけられたのが、2020年から継続して毎年9月に実施されている「豊岡演劇祭」<sup>1)</sup>である。

2023年現在、豊岡演劇祭は図1に示すように9つのエリアにまたがって開催されており、豊岡市を訪れた観光客が複数のエリアを周遊することを促す文化観光イベントとなっている。

一方で、過去に開催された豊岡演劇祭では、参加者に対して実施したアンケート調査の結果、公共交通機関等を利用して移動した参加者の会場間移動のスムーズさに対する肯定的な回答の割合が、自家用車等を利用して移動した参加者と比べて大幅に低く、会場間の移動の不便さへの不満が、演劇祭参加者のエリア間周遊促進の障壁になっている可能

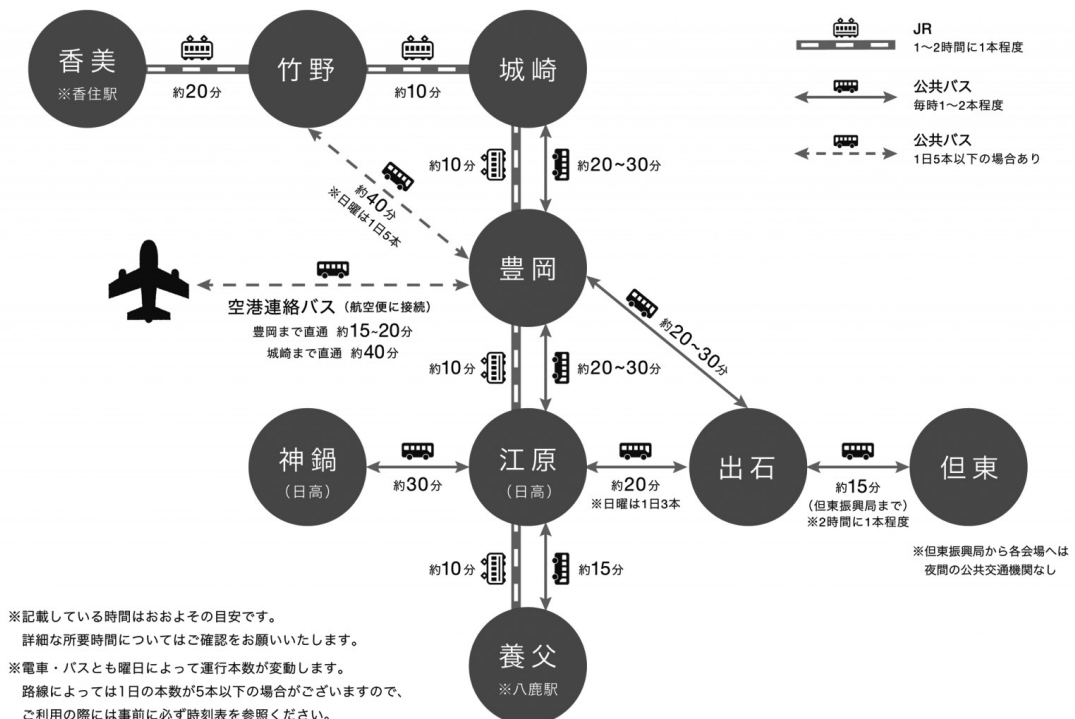


図1 豊岡演劇祭2023開催エリアの位置関係  
 出典：豊岡演劇祭実行委員会作成<sup>2)</sup>

性が指摘されている(野津ら、2023)。

観光客の周遊の足かせとなる移動の不便さは、「移動の実現が実際に不可能であること」と「移動の可能性に不安を感じる」との2つに大別できる。豊岡市のようにモータリゼーションが進行し、地域交通の自動車依存傾向が強い地域において、旅行中の自動車運転を志向しない観光客の移動可能性(以下では、モビリティと呼ぶ)を高めるためには、公共交通ネットワーク自体の機能強化を図ることが最も有効な解決策の一つであると考えられる。しかし、人口密度の低い地方部において、公共交通機能の全面的な強化を図るには莫大な投資が必要となる。

また、仮に特定イベントの会期中に限って、必要とされる区間のモビリティを集中的に高めることができたとしても、文化観光推進の目的として地域活性化が掲げられている以上、文化観光イベントへの投資は特定の会期を過ぎると水泡に帰するような施策ではなく、会期後に地域へ何らかのレガシーを残せる可能性がある施策であることが望ましい。

そこで本研究では、豊岡市における文化観光推進の新しいエンジンとして期待される豊岡演劇祭のモビリティ課題のうち、移動に不安を感じるケースに着目し、不安を解消するための情報提供手法として、時限的な言語景観の可能性について探索することとした。

## 2. 言語景観に関する先行研究

言語景観とは、看板・標識・掲示物等の公共空間における文字言語の活動を指す。言語景観に関する先行研究の整理は、地方開催型芸術祭における時限的な言語景観を比較研究の対象とした野津ら(2023)が詳しく、地理学者でありながら1970年代に言語の要素に注目し、言語景観を「言語及びその視覚表現である文字から見た都市景観」と定義した正井(1972)から現在に至るまで、半世紀間に渡る言語景観研究の流れをまとめている。一方で、これも野津ら(2023)が指摘しているとおり、観光場面に焦点を当てた言語景観研究は未だ少ない。ロ

ング・斎藤(2022)はテーマパークの言語景観に触れているが、常設的な言語景観についての研究である。芸術祭を文化観光の動力として周辺地域への周遊に結びつけるためには、都市空間に常設された言語景観に加えて、イベント開催をきっかけとした時限的な言語景観、とりわけ移動者が交通空間を通行する際に求められる情報を伝達する言語景観としての交通サイン(以下、サインとする)を設置することが必要だと考えられる。

その時限的な言語景観について、香川県の「瀬戸内国際芸術祭」と新潟県の「越後妻有 大地の芸術祭」を事例として比較研究したのが野津ら(2023)である。しかし、野津ら(2023)の研究対象はいずれも現代美術の作品展示を中心とした地方芸術祭であるだけに、ライブパフォーマンスを中心とする地方演劇祭とは、時限的な言語景観について考える上で、会場へのモビリティが限定的であるという共通点がありながらも、両者の参加者が行程を選択する上での時間制約の条件は大きく異なる。すなわち、現代美術の芸術祭は、原則として各参加者が任意の時間に会場へアクセスすれば作品を鑑賞できるが、演劇祭には各作品の開演時間という時間的制約がある(野津ら、2023)ため、地方演劇祭に求められる時限的な言語景観の設置にあたっては、地方芸術祭のそれらを参考にしつつも、新たな観点から検討を加えることが求められる。

また、前述の違いにより、芸術祭の人流は比較的分散するが、演劇祭の人流は常に特定の会場に集中するという特徴の差異が生まれる(野津ら、2023)。この違いの意義については、藤野(2022b)が詳細に議論している。藤野(2022b)は、演劇祭のようなライブパフォーマンスを中心とした舞台芸術フェスティバルが、従来の多くの文化観光コンテンツ以上に、特定の時間・会場に人流を集中させることで生み出される「一期一会の美的体験」による「上演者と観客との相互作用」がもたらす「一回性のアウラ」によって、「文化の振興、観光の振興、地域の活性化の好循環を図る」という文化観光推進法の本来の目的に対してより効果的に機能する可能性を指摘した。そのため、観光施設としては時限的な

存在であるアーティスト・イン・レジデンス施設を拠点と定めた上で文化観光の推進を掲げる豊岡市を研究事例とし、現代美術の芸術祭と比較してもさらに時間制約が大きく、観光周遊の難易度が高いといえる地方演劇祭における時限的な言語景観について研究することは、先行研究と比較した新規性があるだけでなく、今後の日本社会における文化観光の幅を広げる可能性について考える上でも重要だと考えられる。

### 3. 研究目的

本研究を進めるにあたっては、次の2つの研究仮説を設定した。

[仮説1] 多拠点型の地方演劇祭においては、モビリティに対する不安が観光周遊の障壁となっている。

[仮説2] 観光周遊の障壁となるモビリティに対する不安は、時限的な言語景観を整備することによって軽減することができる。

また本稿は、芸術文化観光学研究の確立に貢献すべく、芸術文化観光専門職大学の臨地実習科目における学生の学びと学術研究との連環から実践知を得る手法を探索した記録でもある。そのため、[仮説1]と[仮説2]に加え、次の仮説を追加設定することで、同校の現時点における教育と研究との連携状況を記録する研究ノートとしたい。

[仮説3] 芸術文化観光専門職大学の複数の臨地実習科目を連携させ、履修した学生が自ら地域課題を発見し、改善策を立案し、実践することが、芸術文化観光学の新たな知見を生み出す動力になる。

### 4. 調査概要

本研究は、前章までに示したように、文化観光推進法に基づき2023年度までに認定された地域計画

の中でもライブパフォーマンスを主要な文化資源として位置付けていることが特徴的な豊岡演劇祭を調査対象とし、具体的には2023年9月14日(木)～24日(日)の11日間に開催された「豊岡演劇祭2023」を事例とした上で、前後を含めた研究期間を「会期前」「会期中」「会期後」の3つに分けて調査を実施した。

はじめに、会期前の調査として、2023年7月14日(金)にインタビュー調査を実施した(第5-1項)。このインタビューは、前年の2022年9月15日(木)～25日(日)の11日間に開催された「豊岡演劇祭2022」の参加者に向けて、主に豊岡演劇祭2022における時限的な言語景観の有無や内容がもたらす周遊行動への影響についてインタビューしたものである。調査対象者としては、兵庫県豊岡市に所在する芸術文化観光専門職大学で2022年当時に実習科目「芸術文化・観光プロジェクト実習2」を履修し、実習先として「豊岡演劇祭実行委員会」を選出した学生から2名を選定し、2名同時にインタビューを実施する形態を取った。ただし、2名の学生のうち、1名は芸術文化観光専門職大学キャンパス内にて対面、1名はGoogle Meetを活用したオンライン接続にて実施した。インタビューは2023年度に同校にて開講された後続の実習科目「芸術文化・観光プロジェクト実習4」の一部として実施されたが、対象の学生にはインタビューに先立ってインタビューの様子をGoogle Meetの録画機能を用いて記録すること、インタビュー内容の一部を研究に活用することの2点を説明し、2名ともから同意を得た。

次に、会期中の調査として、豊岡演劇祭2023の会期中に同校にて開講された実習科目「芸術文化・観光プロジェクト実習3」の一部として、会期前の調査によって整理された豊岡演劇祭2022における交通案内の課題を改善するための時限的な言語景観を制作し、豊岡演劇祭2023開催エリア内の駅・バス停をはじめとした交通拠点に掲出を行った(第5-2項)。掲出は掲出先を管轄する豊岡市および全但バス株式会社の了解のもと、豊岡演劇祭2023の会期が終了するまで実施された。

最後に、会期後の調査として、2024年2月28日



(水)にインタビュー調査を実施した(第5-3項)。このインタビューは、豊岡演劇祭2023の参加者に向けて、主に豊岡演劇祭2023の会期中における旅行の行程と満足度、および会期中に現地に掲出された交通案内への感想についてインタビューしたものである。調査対象者の選定方法としては、豊岡演劇祭2023における「うずまくパス」<sup>3)</sup>購入時のウェブ画面において「豊岡演劇祭2023来場者インタビューに関する情報送付」希望の有無を質問し、希望した購入者に対して、会期後に調査概要と来場者インタビュー申込フォームにアクセスできる電子メールを送付した。本来であれば、会期後の調査は、なるべく豊岡演劇祭2023の終了直後に実施し、十分なサンプル数を集めることが望ましい。しかし、会期後に前述の電子メールを送付した参加者のうち、最初の1名とようやく直接連絡が取れたのが2024年2月末であったため、本稿の調査は当該1名のみを対象とする試行的なインタビューに留まっている。該当の1名へは、Zoomを用いたオンラインインタビューを依頼し、Zoomの録画機能を用いてインタビューの様子を記録することと、インタビュー内容の一部を個人特定できない形で編集し、研究に活用することへの同意を得た。

以上の調査方法は、学術的により確かな知見を得るためには、特に会期前と会期後のインタビュー調査のサンプル数とサンプル間の偏り、および調査項目の網羅性に課題があると認識している。しかし、第3章の[仮説3]でも述べたとおり、本稿は芸術文化観光専門職大学における教育内容から得られた実践知とその方法論の構築過程を記録することもその執筆目的に含まれるため、限られたリソースを大規模な調査の実施に振り向けるのではなく、臨地実習とその前後の教育指導を優先した経緯があり、そのことが本稿の制約となっている。そのため、本研究で得られた学術的成果は原著論文として公表する水準には未だ達していないものの、これまでの萌芽的な研究成果と研究方法の探索過程を共有することが芸術文化観光学研究の発展に資すると考え、本稿を研究ノートとしてまとめるに至った。

## 5. 調査結果

第4章で概要を示した調査について、本章では以下の3つに分けてそれぞれについて報告を行う。

[調査1] (会期前) 豊岡演劇祭2022参加者へのインタビュー調査

[調査2] (会期中) 豊岡演劇祭2023における限定的な言語景観の設置

[調査3] (会期後) 豊岡演劇祭2023参加者へのインタビュー調査

### 5.1. (会期前) 豊岡演劇祭2022参加者へのインタビュー調査

本項では、会期前の2023年7月に実施したインタビュー内容を整理する。インタビュー対象者2名には、豊岡演劇祭2022における言語景観に対する感想と、「いつ、どの地点に、どのような情報提供があれば良かったか」という改善に繋がるコメントを求めたところ、2022年9月当時にまとめた実習のメモを参照しながら以下4点についての意見が寄せられた。

[意見1] 駅の改札を出たあと、どちらへ向かえばいいのかわからない。

[意見2] 駅やバス停から、会場までの道のりがわからない。

[意見3] バスの乗り換えがわかりづらく、間違えることがある。

[意見4] 臨時バスや観光バスの存在に関する情報を事前に得にくい。

[意見1] についての具体的な事例としては、会場最寄り駅の一つである江原駅<sup>4)</sup>の橋上駅舎の改札口で、会場の一つである「江原河畔劇場」へ向かうのに「東口」と「西口」のどちらへ出たら良いかが分からず、道に迷ったとのことだった。

[意見2] についての具体的な事例としては、特に会場最寄り駅の一つである八鹿駅<sup>4)</sup>から約1.1km離れた会場である「やぶ市民交流広場」へ向かう道

のりが分かりづらかったとのことだった。

[意見3]についての具体的な事例としては、特に「やぶ市民交流広場」の最寄りとして全但バスの「諏訪町」バス停が利用できる等、バス停名が会場名とも最寄り駅名とも異なるような時に、どのバスに乗ったら目的地に辿り着けるのか、どこで降りれば良いのが難しく不安だったとのことだった。

[意見4]については、会期中に通常の公共交通ネットワークではカバーしきれない会場アクセスのために設定される臨時バス便や、会期中に臨時増発される観光バス便<sup>5)</sup>等の情報を事前に得ることができていなかったとのことだった。

以上の4つの不安が、[仮説1]で示したように慣れない観光客の周遊の障壁となっている可能性があることから、[仮説2]に対応するモビリティ不安解消のための時限的な言語景観の設置について、次項で詳細に検討していく。

## 5.2. (会期中) 豊岡演劇祭 2023 における時限的な言語景観の設置

本項では、前項のインタビュー内容を整理した上で得られた豊岡演劇祭の時限的な言語景観の課題への気づきをまとめながら、会期中に芸術文化観光専門職大学の学生が考案したアイデアを基に実習先の豊岡演劇祭実行委員会が制作し、掲出したサインのデザインについてまとめる。

前項の[意見1]に対応する言語景観としては、江原駅の改札口前の豊岡市が管理する壁面に、図2や図3のような時限的なサインを掲出することとした。江原地区のプログラム鑑賞を目的に城崎・豊岡方面または京阪神方面から訪れた参加者に向けて、目的地の存在と方向を示すことを狙いとしている。

前項の[意見2]への対応としては、最寄りの駅やバス停から会場への道のりが分かりにくい場所を中心に、豊岡演劇祭のキービジュアルをプリントしたのりを立てて案内することにした。



図2 江原駅改札口に掲出した駅前周辺地図

出典：豊岡演劇祭実行委員会作成

**← 神鍋**  
kannabe

**B01**  
植村直己冒険館  
神鍋高原方面 下車

**B02**  
旧名色スキー場  
名色駐車場 下車

**B03**  
神鍋高原キャンプ場  
神鍋温泉中とら岩前 下車

# 豊岡演劇祭2023

## Toyooka Theater Festival

**→ 江原**  
ebarara

**E07**  
日本基督教団  
但馬日高伝道所

**← 江原**  
ebarara

**E01**  
江原河津劇場

**E02**  
ワークピア日高

**E03**  
デモクラティック  
スクール TOIRO

**E04**  
駅前イベント広場

**E05**  
江原 101

**E06**  
友田酒造

**江原駅発 全但バス時刻表**

神鍋高原 方面	For Kannabe
6 38 神鍋高原行 [注] 平日・土曜日のみ	
7	
8 32 神鍋高原行	
9	
10	
11 40 神鍋高原行 [注] 平日のみ	
12 48 神鍋高原行	
13	
14	
15 0 神鍋高原行 [注] 平日のみ	
16	
17 0 神鍋高原行 [注] 日曜・祝日と9/22~24のみ	
18 0 神鍋高原行 [注] 平日・土曜日のみ	
19 0 神鍋高原行 [注] 平日のみ	
20	
21 20 神鍋高原行 豊岡演劇祭特設バス [注] 9/16・17・22・23のみ	

**『三本足で山を登る』**  
9/22(金) 15:30  
9/23(土) 15:30  
9/24(日) 15:30

**『意の外の結婚式』**  
9/22(金) 18:00  
9/23(土・祝) 18:00  
9/24(日) 18:00

**『五体』**  
9/18(月) 17:00  
9/22(金) 17:00

**『三本足で山を登る』**  
9/22・23・24  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『意の外の結婚式』**  
9/22・23・24  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『五体』**  
9/18・19・22・23  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『三本足で山を登る』**  
9/22・23・24  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『意の外の結婚式』**  
9/22・23・24  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『五体』**  
9/18・19・22・23  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『三本足で山を登る』**  
9/22・23・24  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『意の外の結婚式』**  
9/22・23・24  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

**『五体』**  
9/18・19・22・23  
神鍋高原行  
[注] 平日・土曜日のみ

図3 江原駅改札口に掲出した会場・演目一覧（一部掲載） 出典：豊岡演劇祭実行委員会作成

# 豊岡演劇祭2023

## Toyooka Theater Festival

**豊岡駅からバスで行ける演目**

**鳥丸ストロークロック×但東の人々**  
『但東ざいざい』  
T01 久畑 一宮神社（無料送迎バスを運行）  
豊岡駅 9/23(土) 15:30発  
豊岡駅 9/24(日) 09:30発

**ストミック**  
『サンデードライバー』豊岡演劇祭3町ツアー  
T02 大石家住宅『出石』乗換・「矢根」下車  
豊岡駅 9/23(土) 12:50発  
出石行に乗り、終点で奥藤行に乗り換

**知念大地+岩田奎**  
『五体』  
I05 space(堀本堂店前)「福居」下車  
豊岡駅 9/23(土)・24(日) 16:10発  
出石行に乗り、「福居」から徒歩7分

**小林企画**  
『アントロポセン』  
N05 中竹野地区コミュニティセンター「轟」下車  
豊岡駅 9/23(土)・24(日) 10:46発  
竹野行に乗り、「轟(とどろき)」から徒歩3分  
※到着から到着まで1時間半程度の待ち時間がございます。

**バスの出発時刻までこのロータリーでお待ちください 交通事情により出発が遅れる場合があります**

図4 豊岡駅バスロータリーに掲出した案内サイン 出典：豊岡演劇祭実行委員会作成



図5 会場最寄りバス停に掲出した案内サイン  
出典：豊岡演劇祭実行委員会作成



図6 臨時バス乗り場に掲出した案内サイン  
出典：豊岡演劇祭実行委員会作成

前項の[意見3]および[意見4]に対応する言語景観としては、豊岡駅バスロータリーの全但バス株式会社が管理する壁面に図4のような時限的なサインを掲出し、会場最寄りとなる各バス停(図5)や臨時バス乗り場となるバス停(図6)にもバス停ポールにそれぞれ時限的なサインを掲出することとした。図5と図6は会場番号を大きく目立たせているのが特徴のひとつであるが、会場番号の下に配置する文字として図5は会場名、図6は演目名を目立たせる違いを設けることで、どちらがより不安を解消する言語景観として機能するかの比較検討を試みた。

### 5.3. (会期後) 豊岡演劇祭 2023 参加者へのインタビュー調査

本項では、前項にまとめた豊岡演劇祭 2023 における時限的な言語景観について、会期後に参加者へインタビューした内容をまとめる。調査対象者は、うずまきパスの購入者のうちの1人であるが、個人の特定を避けるために本論文内では仮に「A氏」とする。

A氏は、過去の豊岡演劇祭にも複数回訪れたことがある東京都在住の参加者で、豊岡演劇祭 2023 の会期中は2023年9月14日(木)～19日(火)の6日

間、兵庫県豊岡市内に滞在した。滞在中は、一部の期間(9月15日午後～19日午前)のみレンタカーを借り、レンタカーと公共交通機関を使い分けながら、複数の開催エリアを周遊したという。

A氏が6日間の滞在のうち、演目鑑賞のために訪問したのは「豊岡」、「城崎」、「江原」の3エリア、演目鑑賞以外の宿泊および観光目的で訪問したのは「神鍋」1エリア、残りの訪問しなかった5エリアのうち、過去に訪問経験が有るのは「竹野」「出石」「但東」「養父」の4エリアが、未だ訪問経験が無いのは「香美」の1エリアであった。A氏は豊岡演劇祭における交通手段の選択基準として「自分1人で周るのであれば、できれば車に乗らない方が良いと思っている」「豊岡・城崎・江原・出石の4エリアであれば鉄道やバス等の公共交通手段が発達しているため、車を使わずに周れると思う」「竹野エリアは鉄道が使えるが駅と会場や観光地が離れている<sup>6)</sup>ため交通手段を迷う」「神鍋・但東・養父・香美の4エリアへ行くならば迷わずレンタカーを借りる」「いずれのエリアも、豊岡に詳しくない同行者がいれば迷わずレンタカーを借りる」と話した。

A氏には、旅程について詳しくインタビューした後、前項にまとめた豊岡演劇祭 2023 における時限的な言語景観を実際に現地に掲出したときの写真



表1 豊岡演劇祭2023におけるA氏の旅程(A氏の語りを基に野津作成)

日付	鑑賞プログラム	会場エリア	鑑賞以外の滞在エリア	宿泊先	交通手段
9/14(木)	なし	なし	豊岡	城崎	公共交通
9/15(金)	『KOTATSU』 『弱法師』	江原 城崎	江原	城崎	公共交通→ レンタカー
9/16(土)	『柔らかに揺れる』 『音楽と言葉の旅「ふるさと」』 『フェスティバルナイトマーケット』	豊岡 豊岡 江原	江原	神鍋	レンタカー
9/17(日)	『弱法師』(2回目) 『フリンジストリート』 『習作・チェホフのかもめ』	城崎 城崎 江原	神鍋	神鍋	レンタカー
9/18(月)	『カミングアウトレッスン』 『家を鳴らす』 『五体』 『フリンジストリート』(2回目)	豊岡 江原 江原 城崎	なし	城崎	レンタカー
9/19(火)	なし	なし	豊岡	なし	レンタカー→ 公共交通



図7  
江原駅改札口前に図2・図3の言語景観を掲出した様子  
撮影:野津

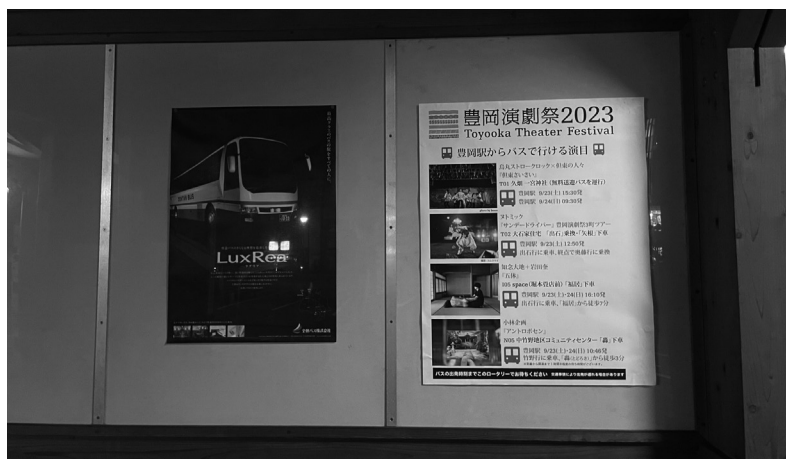


図8  
豊岡駅バスロータリーに図4の言語景観を掲出した様子  
撮影:野津



図9・図10 会場最寄りのバス停ポールに図5の言語景観を掲出した様子

撮影：野津（図9は全体図、図10は拡大図）



図11・図12 豊岡駅前の臨時バス乗り場に図6の言語景観を掲出した様子

撮影：野津（図11は全体図、図12は拡大図）

をZoomの画面共有機能を用いて提示し、それぞれについてコメントを求めた。

〔意見1〕と〔意見2〕に対応する図7およびその拡大図へのA氏の感想は、「必要な情報としては妥当だけれど、デザインとしては不十分な状態」という

ものだった。より具体的には、「デザインとしてはサインとしての誘導の機能が強いほうがよくて、インフォメーションはもっと裏側に入って小さくて構わない」「矢印やバスのピクトグラムがもっと大きく目立っていた方がよい」「個別の情報が必要な人は

もっとサインに接近したり自分の端末で検索したりすれば済むはずなので、サインとして掲出する中には細かい情報は入らなくてもよい」「もっと情報の優先順位にメリハリをつけてもよい」という意見だった。図8およびその拡大図についても、A氏は「江原駅改札口前と同様に、整理された情報としてはこれが妥当なんじゃないか」「あとはデザインの整理が必要だと思う」との意見を示した。

次に、A氏には[意見3]に対応する図9および図10の写真を見せ、感想を求めた。図9および図10についてのA氏のコメントは、「演劇祭のこのテーマカラー（著者補足：赤）とグラフィック（著者補足：キービジュアル）を決めたのはサインが分かりやすくて良かった」「演劇祭のサインだと一目でわかる感じがとても優れている」「サインとしては少し控えめな感じで、もう少し主張があればわかりやすくなる」「ただ、バス停自体の存在感が控えめなので仕方ない面はある」というものだった。

最後に、A氏に[意見3]と[意見4]に対応する図11および図12の写真を見せ、感想を求めた。前項で記したとおり、図5・図9・図10のサインでは会場名をより目立たせており、図6・図11・図12ではプログラム名をより目立たせているという違いがある。A氏のコメントは、「本当は前面に出すべきなのはプログラム名で、その方がわかりやすい」「一方でプログラムは週末毎に変わったりするし、同じバス停に紐づくプログラムが複数あるとごちゃごちゃとするので、会場名の方が情報量は減らせる」というものだった。

## 6. まとめと考察

本章では、第3章で設定した3つの仮説について、第5章の調査結果を基に振り返るとともに、仮説の設定後に調査の実施過程で新たに得られた視座についても考察を試みる。

まず[仮説1]については、本研究の調査過程で十分な検証がなされたとは言い難いものの、会期前のインタビュー調査によれば、豊岡市周辺の地理にある程度は慣れた芸術文化観光専門職大学の学生で

もモビリティに対する不安が存在することから、公共交通を利用して豊岡市内を移動する演劇祭参加者やイベント期間外の観光客にとっても、モビリティに対する不安が観光周遊の障壁となっていることは十分に考えられる。

[仮説2]については、会期中の時限的な言語景観の設置と会期後のインタビュー調査の組み合わせから、時限的な言語景観を整備することでモビリティに対する不安を軽減できる可能性は示唆されたが、そのデザインがより重要であることが明らかになった。

A氏は、時限的な言語景観をデザインするときの考え方について、過去に自身のキャリアの中で広告関連の業務に携わった経験も踏まえ、小売店の店頭サイン計画やデザインで使われる「近景・中景・遠景」という概念を援用することを勧めた。例えば、商品棚がひしめくスーパーマーケットでは、遠景では天井付近にある情報しか来店客に届かないという。中景では商品棚のうち主に来店客の顔の額付近の情報がよく目に入るとされ、近景では実際の商品を置く場所にどのような情報を配置するか考えるという。言語景観についても「近景・中景・遠景」の分類を概念として適用すると整理できることがあるのではないかと。

都市景観における「遠景・中景・近景」については、1970年代には樋口（1975）が既に論じている。樋口（1975）は「ランドスケープについては、伝統的に、近景、中景、遠景という分類がなされてきた。これは、絵画や写真などの表現芸術において、風景を写生、撮影する場合、平面上に立体感をだすためにとる構図的な技法であるとともに、風景をとらえるための重要な大別法であるといわれる。ランドスケープの全体像をとらえるうえで、理にかなうがゆえに、長い間とられてきた分類法であるといえる。」とまとめている。「近景・中景・遠景」を分類する概念は、絵画・写生の技法として生まれ、都市景観の分野で長年にわたって活用されてきた。現在ではその概念はさらに拡張され、小売マーケティングの分野にも応用されるようになってきているという。しかし、その拡張の間に存在すると考えられる言語景観研





図13 2020年に改装された全但バス江原河畔劇場停留所 撮影：野津

究の分野では、これまで「近景・中景・遠景」という分類を用いた情報整理はされてこなかったのではないだろうか。

言語景観においても、小売マーケティングと同様に伝えるべき情報に階層性がある。例えば観光客が歩いている時に遠景で視覚体験としてまず見せたいのは「ここにバス停がある」という情報であり、行先や時刻等のさらに細かな情報は必要とする人に複数回に分けて届ける方が、必要な人に必要な情報が届きやすい。A氏はその点で、バス停の壁面が大きく豊岡演劇祭のイメージカラーで塗られた全但バスの江原河畔劇場停留所(図13)は優れていると評価した。一方、図9で示したバス停の時限的な言語景観の部分は、図5で示したように、「豊岡演劇祭の観光周遊に活用可能なバス停が存在する」という遠景で伝えるべき情報内容であるにも関わらず、掲示の大きさや掲示方法(図10)が中景程度の目線に対応しているため、デザインとしてちぐはぐな印象を与え、受け手である演劇祭参加者や観光客に対して必要な情報が伝わりにくかった、と説明することができるようになった。

[仮説3]については、本研究の推進を通じて、豊岡演劇祭2022で実習に参加した学生が実際に周遊しながら道に迷ったり不安に感じたりしたことを整理し、まとめたことをきっかけに、豊岡演劇祭2023の実習ではそうした迷いや不安を解消または軽減するための時限的な言語景観について検討し、実際に会期中に実地にサインを掲出するところまでを、複数の実習科目を跨いだ一連の流れで実施した。そのため、豊岡演劇祭2022と比較すると、豊岡演劇祭2023では一定程度、周遊を促すために必要な交通情報の要素や掲出すべき地点等の整理が進んできたと考えられ、芸術文化観光学の新たな知見が生まれつつあるといえる。

具体的には、地方芸術祭における時限的な言語景観の分類方法について、野津ら(2023)が公共サインの目的による4分類(誘導サイン・位置サイン・規制サイン・案内サイン)と、マズローの五段階欲求説に沿った新たな5分類(生理的欲求・安全の欲求・所属と愛の欲求・承認欲求・自己実現の欲求)を活用することを提案してきたことに加え、本研究では新たに言語景観における距離の3分類



(近景・中景・遠景)を導入することによって、時限的な言語景観が実際に設置した時により多くの人に伝えるべき情報を届ける装置となる可能性を示すことができた。また、これまでの豊岡演劇祭における時限的な言語景観は、豊岡市周辺の地理に慣れない、または自家用車を運転するという選択肢を持たない参加者へ情報を伝えるためには、情報配置の優先順位とデザイン面での課題が未だに課題が残っていることも明らかになった。

## 7. 課題と今後の展望

本研究の課題は、第4章でも予め述べたとおり、インタビュー調査のサンプル数が少ないことである。会期前のインタビューは同じ属性の学生2名を対象とした同時インタビューであり、会期後のインタビューではすべての要件を網羅した該当者を研究期間中に僅か1名のみ見つけることができた。そのため、彼らの語りから得られた情報の中には、今後の地方演劇祭における時限的な言語景観が必要とする要件についての重要な知見が含まれていたものの、情報の網羅性や偏りについては課題が残る結果となった。

また、野津ら(2023)では扱われていた時限的な言語景観における多言語表示の手法や、交通案内以外の目的を持つサイン以外の言語景観について十分に扱うことができなかったことも、本研究が残した課題である。

今後は、2024年9月の開催を目指す豊岡演劇祭2024を新たな調査対象として、本研究で得られた知見をふまえ、さらに多言語対応した時限的な言語景観を制作し、野津ら(2023)でも課題として上がっていた観光客に向けた時限的な言語景観の整備が当該地域社会の将来的な多文化共生社会の構築に資する可能性についての議論を進めるほか、これまでの研究成果の定量的な評価についても、観光アプリから取得したデータや来場者アンケートの結果を併用しながら、さらに分析を深めていきたいと考えている。

## 謝辞

豊岡演劇祭2023における「うずまきパス」購入時のウェブ画面において「豊岡演劇祭2023来場者インタビューに関する情報送付」希望の有無を質問し、来場者インタビュー協力者を募ることに協力してくださった他、掲出するサインの内容についても協働して検討して下さった豊岡演劇祭実行委員会の皆様、江原駅構内のサイン掲出を許可くださった豊岡市の皆様、豊岡駅バスロータリーと会場最寄りとなる各バス停へのサイン掲出を許可くださり、掲出にもご協力くださった全但バス株式会社の皆様、豊岡演劇祭2022に関するインタビューおよび時限的な言語景観の制作活動に協力して下さった芸術文化観光専門職大学の学生の皆様、ならびに豊岡演劇祭2023に関するインタビューに協力して下さったA様に謝意を表する。

また、本研究はJSPS科研費JP23K11652の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 2019年9月には「第0回 豊岡演劇祭」がブレ実施された。また、2021年9月の「豊岡演劇祭」は、開催前月に兵庫県が新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発出したため中止となった。
- 2) 画像出典：市内の交通機関について、豊岡演劇祭2023公式ホームページ。豊岡演劇祭実行委員会。[<https://toyooka-theaterfestival.jp/2023/access/index.html>] (2024年7月4日閲覧)
- 3) うずまきパスとは、豊岡演劇祭実行委員会が会期前にウェブサイト上で発行した販売価格10,000円(25歳以下、学生、障がい者手帳をお持ちの方は6,000円)の鑑賞チケットで、豊岡演劇祭2023の公式プログラムが一部演目を除き一律1,000円、同フリンジプログラムの対象演目が無料で観劇できるものである。複数のプログラムを周遊することでプログラム毎の単券チケットの合計額よりも安く鑑賞できることから、豊岡演劇祭2023において多くのプログラムを鑑賞することを事前に意図した参加者を抽出できると考えた。
- 4) JR江原駅およびJR八鹿駅は、ともに2023年3月から無人駅となった。出典記事：JR西、山陰線2駅の「みどりの窓口」閉鎖へ 翌日から券売機で対応。神戸新聞。2023年1月25日、神戸新聞NEXT。[<https://www.kobe-np.co.jp/news/tajima/202301/0015991561.shtml>] (2024年7月4日閲覧)
- 5) 豊岡演劇祭2023の会期中は全但バス株式会社が運行する観光周遊バス「たじまわる」(通常は土休日運行)が平日にも追加運行された。(出典：【お知らせ】豊岡演劇祭期間中「たじまわる」が平日運行！。但馬観光協議会。2023年8月14日、たじま旅ネット。[<https://tajima-tabi.net/topics/381466>] (2024年7月4日閲覧))
- 6) 一例として、豊岡演劇祭2023の会場の一つとなった

「竹野浜海水浴場」はJR竹野駅から約1.4km離れており、駅から会場までの所要時間は徒歩で約20分程度である。

## 文献

- 文化庁 (2020) 「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進について (まとめ) ～文化の振興と観光の振興で地域の活性化を図る仕組みづくり～」  
[[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkashisetsu/pdf/92004801\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkashisetsu/pdf/92004801_01.pdf)]  
(2024年7月4日閲覧)
- 文化庁 (2021) 「豊岡市地域計画」  
[[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/bunkakanko/pdf/93093801\\_18.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/pdf/93093801_18.pdf)]  
(2024年7月4日閲覧)
- 文化庁 (2024) 「文化観光推進法 認定計画」  
[[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/bunkakanko/pdf/94041601\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/pdf/94041601_01.pdf)]  
(2024年7月4日閲覧)
- 藤野一夫 (2022a) 『みんなの文化政策講義——文化的コモンズをつくるために』水曜社.
- 藤野一夫 (2022b) 「芸術文化観光学の理念 —その理論枠組のために—」『芸術文化観光学』Vol.1, pp.8-23.
- 樋口忠彦 (1975) 『景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間』技報堂出版.
- ロング, ダニエル、斎藤敬太 (2022) 『言語景観から考える日本の言語環境 方言・多言語・日本語教育』春風社.
- 正井泰夫 (1972) 『東京の生活地図』時事通信社.
- 野津直樹・姚瑤・河村竜也・傅建良・高橋伸佳 (2023) 「地方開催型芸術祭における時限的な言語景観の比較研究 —豊岡演劇祭への応用展開に向けて—」『芸術文化観光学』Vol.2, pp.41-57.
- 豊岡市 (2019) 「豊岡市大交流ビジョン」  
[[https://www.city.toyooka.lg.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/007/410/1.pdf](https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/007/410/1.pdf)] (2024年7月4日閲覧)